

夢湧き夢に夢中

第 11 号

令和7年9月26日 文責：大谷

(前号の続き) ロンドンで開催されたパラリンピックでは準々決勝で敗退も五位という素晴らしい成績を残した平井さんは、四年後のリオデジャネイロ・パラリンピック出場と金メダル獲得という十六歳当時に抱いた夢の実現に向けて、さっそく再始動された。しかし、国内での代表選考会でまさかの敗退。リオ大会への出場を逸した。「自分の中に慢心があった」と当時を回顧された。

そこで、平井さんはもう一度、自身の夢の原点を再確認し、自己を奮い立たせた。なぜなら、次の開催地が、東京だったからだ。東京大会で活躍してこそパラリンピックの素晴らしさや自分のこれまでの努力の成果

を、たくさんの人たちに知ってもらえる絶好の機会だと考えた平井さんは、とにかく練習に明け暮れた。そして、四年前に敗退してしまった国内選考会を見事勝ち抜き、東京大会への出場権を得た。もう一度夢に挑戦できる喜びでいっぱいだったそうだ。

しかし、皆さんも承知のとおり、東京オリンピック・パラリンピックは、新型コロナウイルスの影響で史上初めて一年延期された。さらに、当時、平井さんをはじめ多くの選手たちは練習する場を完全に失った。焦る気持ち。さらに拍車をかけるようにオリンピック・パラリンピック開催に対する世間の批判が相次いだ。「みんな

夢は叶えられなかったが、夢に夢中になることで叶えた」と

夢は叶えられなかったが、夢に夢中になることで叶えた

がコロナで苦しい思いをしている時に、自分は柔道なんてしていないのか」苦悩する日々が続いた。しかし、そんなときに励ましてくれたのが、勤務していた熊本盲学校の同僚の先生方だった。なかには稽古の相手をしてくれた先生もいたそう。この先生は東京・パラリンピック開催期間中も稽古相手として東京まで同行してくれたのだという。

ここまで聞くと、コロナや延期などいろいろあったけど何とか東京大会に出場できたんだな、と安堵したのだが、平井さんにはさらなる試練が待ち受けていた。本大会開幕前の四月のある日、練習中に膝の十字靭帯断裂という大怪我を負ってしまったのだった。アスリートとしては致命傷とも言える大怪我。「もう間に合わない」一時は東京大会出場を諦めかけた。

しかし、ここでも平井さんには夢を応援してくれるたくさんの仲間がいたと言う。平井さんはお話の中で何度も繰り返された。

「わたしの心が折れなかったのは、たくさん仲間がいたから」平井さんは医師や理学療法士の助言と同僚の先生、そして生徒らの応援を受けながら治療に専念して、何とか本大会に出場することができた。結果は残念ながら予選で敗退し「金メダル」という夢を叶えることはできなかったが、東京で平井さんはあることに気づいた。「努力は人を裏切らないが、その努力は決してひとりではできない」と。平井さんの人生を変えた十六歳当時の夢は叶えられなかったかもしれないが、夢に夢中になることで得た人との絆は、どうやら金メダルよりもひととき眩しかったようだ。

■10月には合唱コンクールをはじめ今年は“みなみあそ元気フェスタあつまりへん祭”への全員参加を計画し、学習の一環として各学年で販売やステージ発表及び人権啓発講話の聴講等を行うことにしました。何分初めての試みのため試行錯誤ではありますが、地域とともにある学校づくりを目指して取り組んでまいります。保護者の皆様の御理解と御協力をお願い申し上げます。(詳細は後日改めてお知らせいたします)